

「明治日本の産業革命遺産とエコツーリズムによる地域振興 ～長崎・島原エリア～」

担当教員名 長谷川 直哉

コース概要

日程	2017年9月11日～14日
場所	長崎県長崎市・島原市
参加人数	21名

2015年に世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」として正式登録された旧端島炭鉱（通称：軍艦島）などの産業遺産を巡り、日本の近代化を支えた基幹エネルギーと産業の結びつきについて学びます。また、島原地区における世界ジオパークや文化を活用したエコツーリズムによる地域振興の実態を視察します。

コースのねらい

内容

このフィールドスタディのハイライトは、①世界文化遺産である軍艦島への上陸、②近代日本の産業革命の起点となった三菱重工長崎造船所の訪問、③雲仙普賢岳を中心とした島原半島世界ジオパーク体験の三つです。

「軍艦島（端島）」は、1890（明治23）年から本格的に海底炭坑として良質な製鉄用原料炭を供給してきました。東京ドームの5個分という小島ながら、最盛期には5,200人の人々が住み、人口密度は東京の9倍を超えました。島内には、病院や学校・寺院・神社・派出所や映画館・理髪店などが立ち並び、島の施設だけ人々の日常生活が可能な都市として機能していました。繁栄を極めた軍艦島でしたが、産業の基幹エネルギーが石炭から石油へと移ることにより衰退の一途をたどり、1974（昭和49）年に閉山し、全ての住民が島から離れて現在は完全な無人島となっています。

軍艦島は2001（平成13）年に所有者である三菱マテリアル株式会社（元三菱鉱業）から譲渡され、現在は長崎市の所有となっています。

その後、2015年、国際記念物遺跡会議（イコモス）により、軍艦島を構成遺産に含む「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が世界文化遺産に登録され、再び注目を集めています。2017年公開された韓国映画は軍艦島を強制徴用された朝鮮人らが劣悪な環境で労働を強いられている地獄島として描いており、日韓の歴史問題のテーマとしても扱われています。

今回のフィールドスタディでは、三菱財閥が採掘権を握ってから、石炭産業、製鉄、鉄鋼、造船など近代日本の産業革命を支えた軍艦島の社会経済史的な意義について考え、ここで働き生活した人々の痕跡を体感しました。



「三菱重工長崎造船所」は、2015（平成 27）年に世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」の構成施設の一つです。長崎造船所は三菱重工業株式会社の発祥の地です。いうまでもなく同社は三菱財閥の中核企業ですが、長崎市の経済基盤も支えており、同市は長崎造船所の企業城下町として繁栄し現在に至っています。長崎に投下された原子爆弾によって被爆したものの造船所の施設は完全な破壊を免れ、戦後の長崎の復興を大きく支えてきました。

ここでは多くの民間船舶が建造されましたが、第二次世界大戦中に戦艦「武蔵」をはじめとする多くの軍艦が建造されました。現在でも海上自衛隊の護衛艦を多数建造しており、軍需産業として側面も持っています。そのため、世界遺産登録の構成要素の一つになりましたが、自衛隊の艦船などの整備をしている関係で非公開施設となっています。造船所資料館には長崎造船所前身時代から現在に至る技術の進歩を物語る品々や写真など 900 点余りの史料が展示されており、スタッフによる詳細なレクチャーを受講しました。



「島原半島世界ジオパーク」の中核をなす雲仙火山では、有史以来起きた 3 回の噴火のうち、平成噴火と寛政噴火については詳細な記録が残されており、人々が火山噴火とどのように向き合ったのかを学ぶ事が出来ます。1990（平成 2）年 11 月から始まった雲仙普賢岳の噴火活動は終息まで 4 年 8 ヶ月を要し、「火砕流」と「土石流」により多大な被害を蒙りました。フィールドスタディで訪れた雲仙岳災害記念館（愛称：がまだすドーム）は、雲仙普賢岳噴火災害の脅威と教訓を学習・伝承する施設として設置されたものです。同記念館では、島原観光連盟の坂本専務理事からジオパークやエコツーリズムを中核とした地域振興策についてのレクチャーを受講後、本学学生との意見交換を行いました。ジオパークとは、大地の成り立ちや地形・地質をテーマにした自然公園です。地域全体を自然の博物館と捉え、そこに含まれる自然景観、地質、動植物などの自然環境と、それらを利用している人々の暮らし、歴史、文化を展示物と見なしたテーマパークともいえます。雲仙岳災害の被災者でもあるジオガイドの方の臨場感ある説明によって、火山災害の恐ろしさを追体験するとともに、復興に向けた人々の力強い思いを感じることができました。

学習を終えて

一番印象的だったのは、軍艦島に上陸できたことです。恥ずかしながら、私は今回のフィールドスタディに参加するまで軍艦島の存在を知りませんでした。日本にこのような島が存在すること、日本の産業の歴史をこのような形で見ることに衝撃を受けました。石炭から石油へのエネルギー革命によって軍艦島は衰退し、現在は無人島となっています。活力ある街でも社会環境の変化によって衰退することは、今の時代にも起こりうることだと思います。パリ協定の発効によって、化石燃料から再生可能エネルギーへのシフトが加速しています。石油産業の衰退によって、軍艦島と同じような道をたどる地域は少なくないのではないのでしょうか。オイルマネーによって繁栄を謳歌する国々では、エネルギーシフトに起因するリスクが経済に少なからぬ影響をもたらすと思います。脱炭素社会への移行によって、私たちの生活は様々なリスクに晒されるでしょう。しかし、そうしたリスクの中には、新たなオポチュニティが生まれる可能性もあります。私は軍艦島を反面教師として位置づけ、石油依存から脱却した新しい社会のあり方を問い直すべきだという思いを強く抱きました。（2年 岸 雅海）